

書棚に、読点を、

あつまり、にぎわうことに価値があった空間は、人の距離が切実な問題になったとき、どうなるのでしょうか。規模計画の根拠となる、収容・収蔵面積は、どのように考えたら良いのでしょうか。求められる距離感が2倍になったとき、必要面積は $2^2=4$ 倍に、密度は $1/4$ になってしまうのでしょうか。(そんな建物は、諦めてしまった方が良いでしょう。)
『図書館の書棚』に、ほんの少し手を加え、あたい時代の建築空間が実現するための、具体的な根拠となり得る仕掛けを考えました。

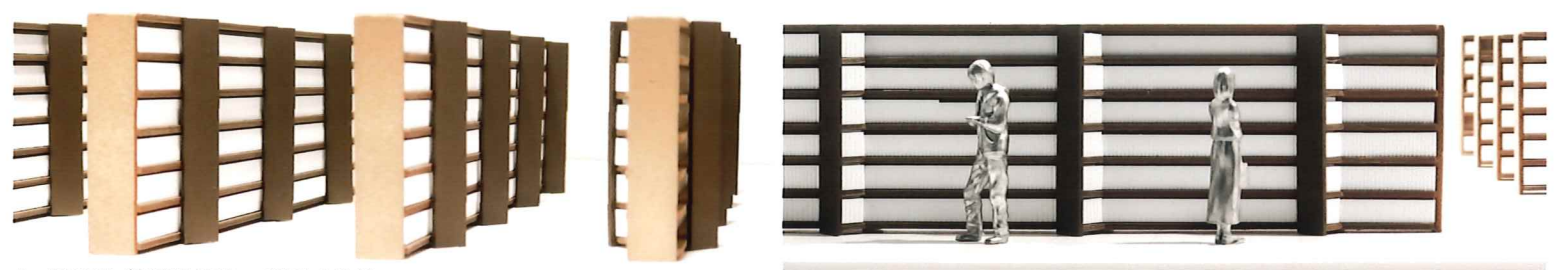
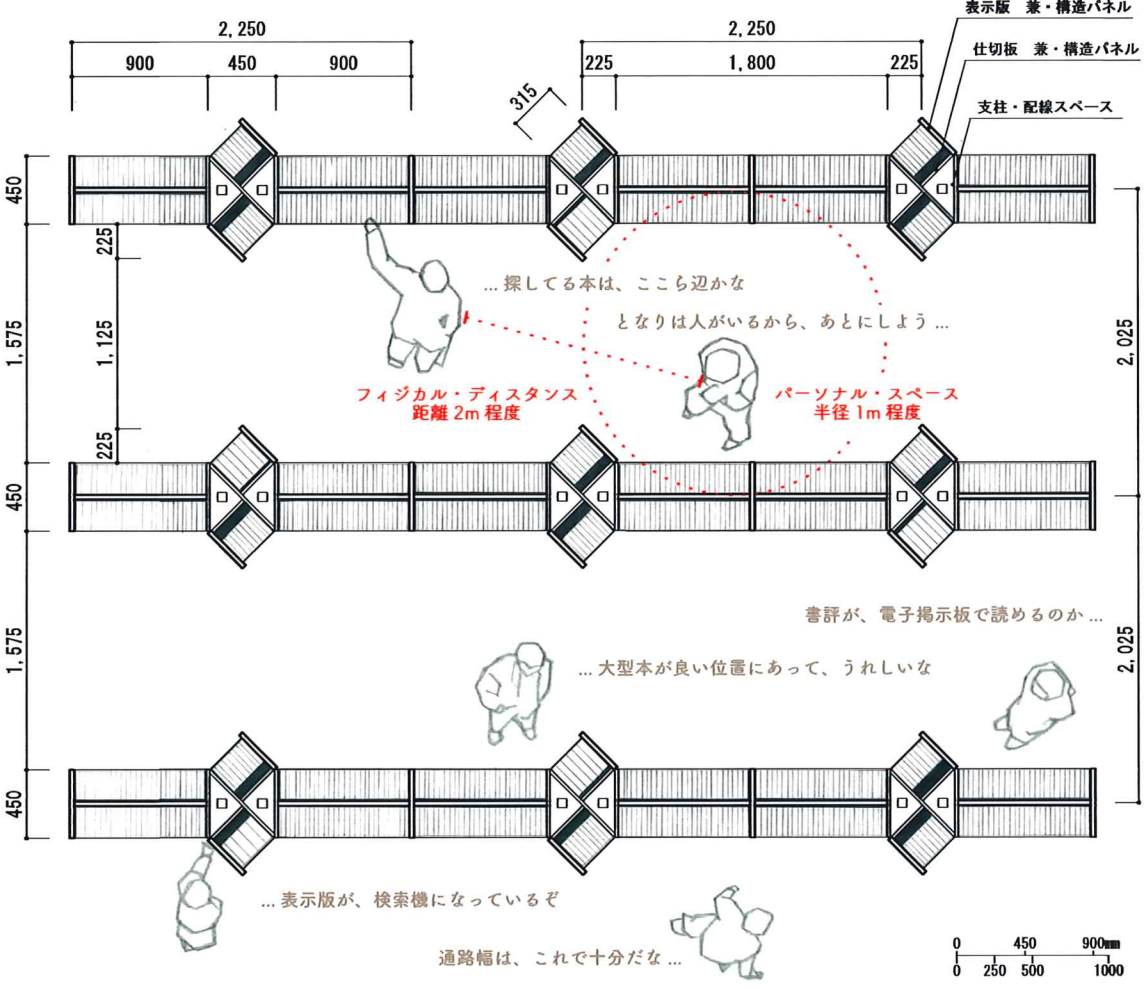
■ ブラウジングの「読点」
利用者は配架面に正対し、サインや背表紙に注目しつつ、書棚に沿って移動する。意図せず他の利用者に接近してしまうことがあるだろう。通常の開架スペースでのブラウジングに対しては、利用者相互に一定距離の確保を求める呼びかけなどは、本来の利用を妨げるうに、実効性に疑問がある。そこで、ゆるやかな区切れ目(ちょうど、文の中の読点のように、前後を繋ぐ小さな「間」となるもの)を設けることで、書架検索の流れを分断することなく、そして利用者にとっても何気なしに、周囲の状況を感じとるような適度な間を取ることができないだろうか。

■ 多機能ヘキサゴナルユニット
900mm モジュールの書架の並びに、その1/2幅に相当する450mmのヘキサゴナル(6角形)ユニットを一定間隔で挿入する。これは45°に振られた棚として現れる。その一方の側面に配されたパネルは、内部仕切板とあわせて安定した構造をなす「連立したコの字型の骨格」として機能する。隣接する書棚と緊結すれば、書架全体の耐震性能向上も見込める。ユニット内部にあって配架上のデッドスペースと思われる三角形の空間は、頭繋ぎを強固にするための支柱や、アンカーボルトを設置する利用が考えられる。さらに、弱電・LAN ケーブル等の配線スペースとして使用することで、照明器具はもとより、電子掲示板やアクセスポイントなどを備え、IoTに対応した新しいタイプの書架・新時代の閲覧室が実現するだろう。

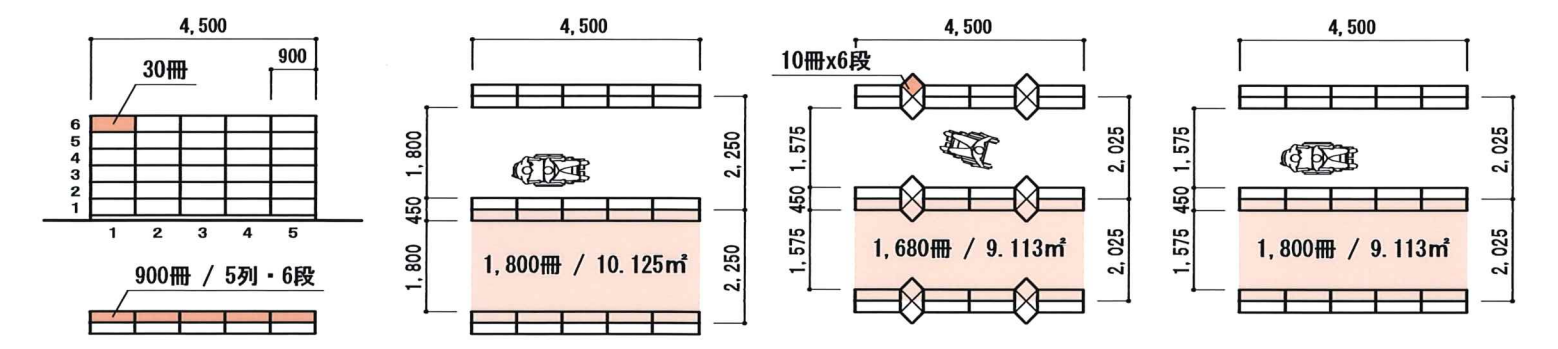
■ “Physical Distancing”
平面図に例示する寸法で配置した場合、書架の列の中に約2m角の単位空間が現れる。他人である利用者同士が無意識のうちに距離をとるとき、このサイズ感恐らく「誰か1人が入ってれば、自分が入って行きたくない」と感じるものであろう(パーソナル・スペース)。これは日本で推奨されているフィジカル・ディスタンスの2mにも概ね適合し得る距離感である。目安となる空間単位を什器と空間の工夫によって「それとなく示す」ことで、利用者に何ら強要することなく、フィジカル・ディスタンスを期待できるはずである。

■ 新時代の閲覧室
それぞれ幅約300mmの表示版と配架棚をもつユニットは、工夫次第で、書架と閲覧室に新たな利用可能性をもたらす。表示版は従来型サイン計画の延長や掲示スペースとしてのみならず、モニター類を埋め込んで各種情報端末として機能させれば、まったく新たな形で利用者を支援し得る。一方、配架棚は適宜ピッチを変えて大型本に対応させれば、手が届きやすく、分類コード上の適切な位置に配架できる。棚ごとに特集を組んだ面展示とすれば、さらに知的好奇心を刺激する書架となる。

■ 収蔵効率
図に示す条件・計算方法で、書架間隔の違い・ユニット有無の収蔵量変化を検討した。面積効率の低下を最低限に抑えつつ感染症対策を行う、新時代の図書館計画の一助となることを願う。



上：模型写真(書架間隔225mmで配置した場合)



収蔵可能量	178 冊/㎡	184 冊/㎡	198 冊/㎡
<ul style="list-style-type: none"> - 900mm幅に30冊配架(30mm/冊) - 6段の複式書架 - 余裕率0として最大収蔵量を算出 	<ul style="list-style-type: none"> - 車椅子2台がすれ違う - 5列6段あたりの収蔵量計算 =30冊x5列x6段 =900[冊/5列・6段] 	<ul style="list-style-type: none"> - 右図同等書架間隔+ユニット - ユニット含む6列6段あたりの収蔵量計算 =(10冊x2列x6段)+(30冊x4列x6段) =840[冊/6列・6段] 	<ul style="list-style-type: none"> - 車椅子と歩行者がすれ違う - 現・中央図書館と同程度(作者調べ)



表示版：書架サイン 書架：一般図書を配架
表示版：大型電子掲示板 書架：大型図書を配架
表示版：検索機モニター 書架：面展示+スポット照明